完本 丸山健二全集（全100巻）
09巻『月に泣く』2018年6月発売！
待望の二年目配本分は9月より刊行開始

柏艪丸航海日誌
〈vol.18〉
2018年夏号
無　料

『完本 丸山健二全集』二年目配本分（計12巻）

2018年9月上旬刊行予定
完本 丸山健二全集10-13　『日と月と刀』

2018年12月上旬刊行予定
完本 丸山健二全集14-15　『銀の兜の夜』

2019年3月上旬刊行予定
完本 丸山健二全集16-17　『落雷の旅路』

2019年6月上旬刊行予定
完本 丸山健二全集18-21　『貝の帆』

定価 本体 各巻6,000～7,000円（税別）
二年目配本分（計12巻）定価 本体77,500円（税別）

※一年分一括予約購入の割引きもございます。詳しくは弊社までお問合せください。（弊社直販のみ）

「完本 丸山健二全集」09
「鳥籠を高く」「月に泣く」の中編2編を収録。

月に泣く
丸山 健二 著
2018年6月刊 /6,000円（税別）

【収録作品】

『鳥籠を高く』
四十歳の主人公は、愛犬と共に、生まれ故郷のM町へ向かう。妻子と職場を失った私は、小鳥の鷽を手に入れ、気ままな後半生のスタートを切る。

『月に泣く』
雪深い寒村の林檎農家。春夏秋冬、四枚の季節の異なる屏風の傍らで眠る私の物語。より良く生きることの困難さを浮き彫りにする。

一年目配本分（計9巻）
完本 丸山健二全集01-09
定価 本体56,000円（税別）　978-4-434-24752-1 C0093

【発行】注文・問合せ先
柏艪舎（はくろしゃ）
札幌市中央区北2条西3丁目1
TEL　011-219-1211
FAX　011-219-1210
e-mail: eigyo@hakurosya.com
HP　www.hakurosya.com

「柏艪丸航海日誌」のご意見、ご感想をお待ちしています。上記までお寄せ下さい。

2018年7月25日新作エッセイ『真文学の夜明け』刊行

丸山健二氏 来札決定！文学の真髄に触れる特別な二日間

講演会『真文学の夜明け』

新作エッセイ『真文学の夜明け』の刊行を記念して13年ぶりに来札！文学の王道を歩む丸山健二。作文もどき、台本もどきの小説を排し、真の文学とは何かを考える。

日　時　2018年 10月 5日（金）
18：00開演
場　所　かでる2.7　大会議室
札幌市中央区北2条西7丁目 道民活動センタービル
参加費　1,500円（税込）
定　員　200名（要予約）

『丸山健二　読書塾』

日本の文学界は壊滅の危機に瀕している。今こそ、育てるべきは優れた読者なのだ。そう決心した、日本が世界に誇る文学界の第一人者丸山健二がその要諦を伝授する。

日　時　2018年 10月 6日（土）
15：00開講
場　所　タケサトビル　会議室
札幌市中央区北2条西3丁目1 タケサトビル4F
参加費　3,000円（税込）
※当日『完本 丸山健二全集』を持参、または会場でご購入いただいた方は、参加費無料。
定　員　30名（要予約）

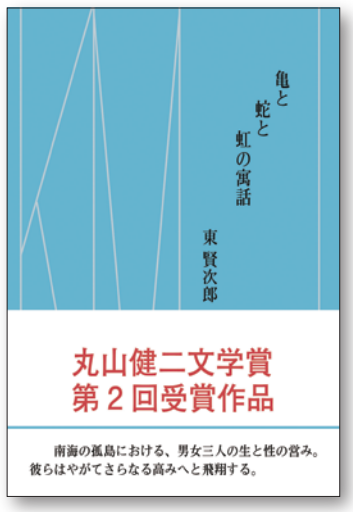
主　催　株式会社柏艪舎　お問合せ・お申込先　TEL 011-219-1211　e-mail : y-kachi@hakurosya.com

---

丸山健二文学賞 第2回受賞作品！

時来たらば蚕が繭を破って羽化登仙するように、人は肉体の繭をかなぐり捨てて天に昇る。

孤島に生きる男二人と女一人。現実社会での生活を棄て、人間とは何か、性とは何か、生とは何かを模索する。理性と狂気と幻覚が交錯する。



鹿児島で過ごした中学高校時代に、沖縄まで船でいく機会があった。いくつもの島を目にし、途中で大きな島には何度か停泊したので降り立ったりもしたが、美しい島々はそれぞれに独特で多様だった。

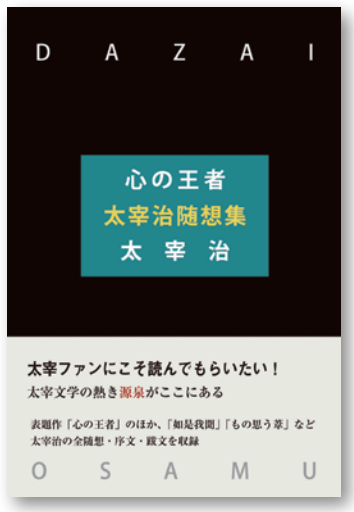
しかしそこは先の戦争で大きな被害を被った地域でもあり、こんな長閑な場所にまで戦争を強要した社会は、よほど緊密な言葉の呪縛力をまとっていたのだろう。それは現在でもより巧妙に姿を隠しながら、変わることなく張り巡らされている。社会が共有するそんな言葉への不信感は、根強く自分の中にある。

言葉が詩を生み神話となって、それを共有する社会が形成され、そこに生じた歪みを是正すべくあらわれた宗教が、社会と相互補完的な役割をもって拡大してきた末に、経済活動を中心とする画一的な大衆社会が出来上がったと考えているが、言葉の組み立てによる人間の思考方法は、時代が変われど、その間ほとんど変わっていないのではないかと思いつつ、神話的なリアリティで現代小説を書こうと試みたのがこの作品で、何もない無人島に暮らしている「彼」と「彼女」はイザナギとイザナミか、あるいはアダムとイブなのか、そこへと「僕」が訪ねていく物語は、現代社会からもっとも遠く離れた、百九十頁ほどのきわめて読みやすい「寓話」ですので、気軽にお読みください。

亀と蛇と虹の寓話
東賢次郎 著
2018年4月刊 /1,700円（税別）

（著者　東賢次郎）

太宰治没後70年
「如是我聞」「もの思う葦」「心の王者」ほか、太宰治の全随想、序文・跋文124編を収めた随想集



心の王者
太宰治随想集
太宰 治 著
2018年5月刊 /2,400円（税別）

太宰ファンならば、読んでおきたい。
太宰文学の源となっている
著者の熱き思いに、ぜひ触れていただきたい！

この五月、ようやく本作『心の王者　太宰治随想集』を刊行することができた。

『太宰治選集』（二〇〇九年柏艪舎刊）発刊後、しばらくして、太宰の随想に接する機会があった。それまで『如是我聞』や『もの思う葦』を読んだことはあったものの、これほど多くの随想を執筆しているとは驚きだった。

小説についてや日常のあれこれが軽妙な語り口で綴られており、またときには先輩作家へ噛みついたり、若者へエールを送ったりと、太宰の色々な表情が浮かんでくるようで面白い。

おそらく随想のなかでも小説と同じように、太宰は事実と虚構を織り交ぜていたのだろう。

本書にも収録されている「海」は、太宰が一家で青森へ疎開する道中が描かれているのだが、作中では、娘に初めて海を見せてやることができたと太宰一人がはしゃいでいる。一方娘は、「川だわねえ」と返すばかりだったというラストは太宰らしく、ユーモラスでもある。

しかし太宰の妻、津島美知子氏は自著のなかで、「なぜ家族団欒を書いてはいけないのか」（実際は家族三人で楽しく海を眺めていたのだという）と嘆いている。

太宰は本書のなかで、随筆は小説と違って、作者の言葉も〝なま〟であるから、よっぽど気をつけて書かない事には、あらぬ隣人をさえ傷つける、と書いているが、家族や身近な人々はこのように傷つけられたことも多かったのかもしれない。

また彼は、自身のことを〝熊の手〟と自嘲している。相手をいたわり撫でるつもりで、ひっ掻いているのだ、と。太宰自身、作家として、また夫として父として、様々な葛藤があったのだろう。

最後に、表題作「心の王者」は、太宰から若者へのメッセージである。

ドイツの詩人シルレル（シラー）の「地球の分配」という詩を用いながら、〝学生というものは、地上の営みにおいては、何の誇るところが無くっても、その自由な高貴の憧れによって時々は神と共にさえ住めるのだ。老成の社会人になりきることは学生にとって、恐ろしい堕落である〟と叱咤激励している。

これまで『太宰治全集』以外に、太宰の全随想を収めた単行本は刊行されていなかったということもあり、企画してすぐに編集作業に取りかかったのが二〇一三年のこと。本来はもっと早い時期の発刊を予定していたが、今年は太宰治没後七十年という節目でもあり、結果的にはいい時期に刊行に漕ぎつけることができたと思う。

この機会に、太宰文学の源泉に触れていただければ嬉しい限りである。

（編集担当　青山万里子）